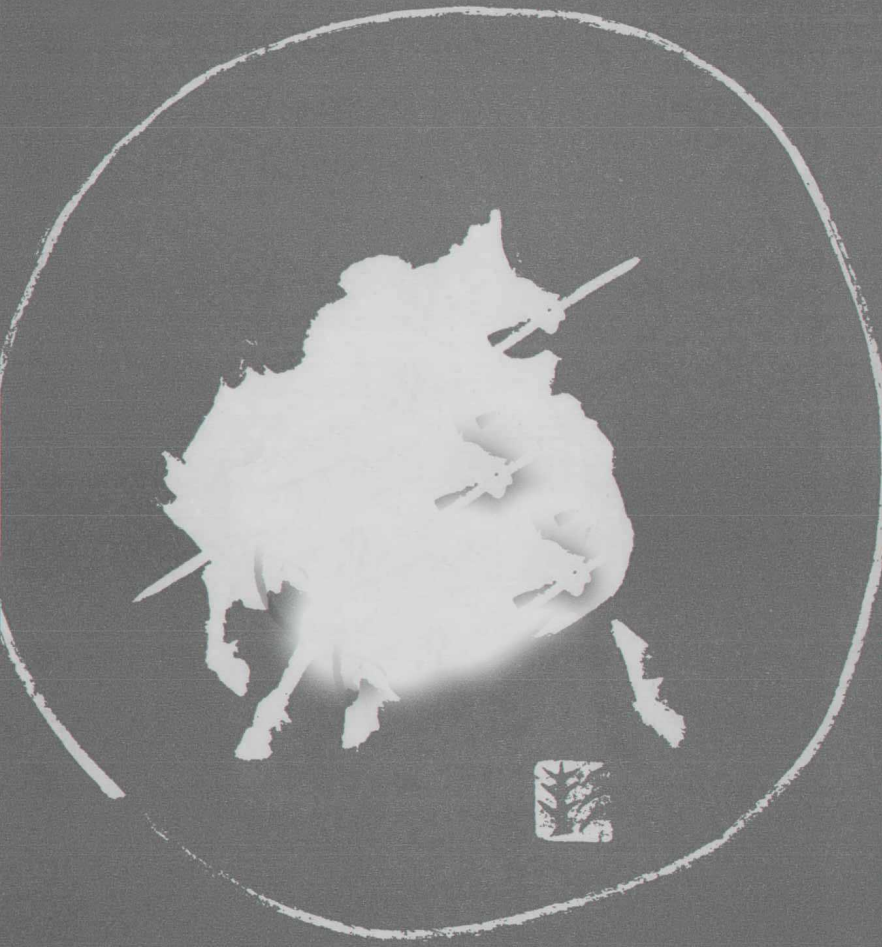
武將列傳

海青幸潮五經

傳五



海音寺潮五郎

武將列傳五

昭和三十八年四月二十日　初版
昭和三十八年六月一日　再版

定価　三八〇円

著者　海音寺潮五郎

発行者　小野詮造

発行所　文藝春秋新社
東京都中央区銀座西八ノ四

印刷　凸版印刷
製本　天鳴製本

© 1963　CHOGORO KAIONJI

目次

武田勝頼　五
楠木正儀　七七
蒲生氏郷　一二三
立花一族　二〇五
あとがき　二六九

装幀　杉本健吉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

武將列傳五

武田勝頼

一

甲斐の国は地味磽确で、物産が少く、米が経済の中心をなしている時代には、一国だけでは大をなしかねる国であった。だから、武田信虎がこの国に割拠している諸豪族を征服統一すると、どうしても他国を切りとらざるを得なくなった。弱肉強食の戦国の時代であるから、強いが上にも強くなっておかないと、他の好餌となるからである。

しかしながら、南方は家柄といい力といい東海一の今川家の領国駿河であり、東方は関東一の北条氏が拠有しているし、北方は山岳地帯であるし、西の方中部信州に向うよりほかはなかった。水は最も抵抗の弱いところを破るものだが、当時の信州はその地勢上、強大な統一勢力がなく、各地に小豪族が割拠していた。武田家にとっては最も食べやすい状態におかれている美肉であった。

しかし、地理的に言って信州への最も出易い出口である諏訪には諏訪氏がいた。諏訪神社の祭神建御名方命の子孫として諏訪の上社の代々の宮司となり、そのへん一帯を領有している。その地方の信仰と富力と武力とをあわせ持っているのだから、なかなか強い。信虎は度々攻撃してみたが、抵抗が

強くて、うまく行かない。

そこで、諏訪氏と和睦し、鋒を転じて、八ガ岳山塊の東側から入って千曲川に沿って北進して海野（今の上田）地方に出る道をとった。信虎の長男信玄――当時晴信――が海野口城主平賀源心入道を討ち取って城をぬいたという名誉の戦功をあげたのは、この期間のことである。

信虎は諏訪氏を調略によって強力な味方にすることを考え、六女の禰々を諏訪家の当主頼重の妻にやり、聟引出として小県郡の長窪城までやって、信州経略のお先棒をかつがせることにした。頼重には当時もう夫人があって、その間に娘が一人あったのだから、それを側室におとすか、離縁するかして、禰々を迎えたわけだ。当時の大名と称する連中のあさましさであり、当時の女のあわれさである。

これは天文九年の十一月のことであった。

この翌年、すなわち天文十年の六月、信玄は老臣らとしめし合わせて、父の信虎を甲斐から追い出してしまった。

主人がかわると、信州経略法もかわる。信玄は海野口のような嶮岨な道から兵を出し入れするより、平坦な諏訪口からした方が便利であると考えた。そりゃ便利にちがいない。信虎だってはじめはこちらから入ろうとしたのだ。

信玄は諏訪家の内部の勢力争いを利用し、頼重の反対党を抱きこんでおいて、いきなり兵を出して、頼重を攻め潰してしまった。

頼重が先夫人に生ませた子はこの時十四であったが、初花の匂うがごとく、絶世の美少女だったという。信玄は一目見て、うっとりとなり、ついに枕席に召す。

ひどい話である。自分が攻め殺した者の娘を抱いて寝ようとは、尋常の神経ではない。しかし、こ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

の時代にはしばしばあることである。戦国という時代のおそろしさだ。世が狂えば人も狂う。人間の持っている、ものに慣れるという機能は、環境にたいする順応性にもなって、人間を艱苦苛烈な環境の中にも生きつづけさせてくれるのであるが、一面では良心を鈍麻させる作用もあるのである。最もあわれなのは、頼重の娘だ。まさしき父の讐に抱いて寝られねばならぬのである。またしても言うが、当時の女はあわれであった。

もっとも、女のあわれさは人類発生以来のことかも知れない。古代野蛮な時代の戦争では、女は最も普通な戦利品であった。女を掠奪することだけを目的として戦争が行われたことも多かった。これは少し前までのアフリカや濠洲あたりの未開人の状態を考えればよくわかることだ。その場合、女達は父母や夫や兄弟らの讐の妻妾になるのである。女の人権が尊重されるようになったのは、文明社会でも、ごく最近のことである。

甲陽軍鑑では、信玄が頼重の娘を側室にしたいと言った時、老臣らが、

「おん敵の片われを、いかに女人とはいえ、お側に召しおかるることよろしからず」

と諫言したので、信玄もこまっていると、その少し以前から武田家に召しかかえられていた山本勘介が、

「殿はご器量人でおわせば、ご寵愛になっても乗ぜられるようなご不覚はござるまい。もし諏訪ご料人に若君でもお出来になれば、この若君をもって諏訪家をお立て下さるであろうと、諏訪家の遺臣共もお家に心を寄せるようになって、むしろ良い結果になることも考えられます」

と、老臣らを説き伏せたと記述している。

山本勘介は実在した人物であるが、山県昌景につかえたごく身分の低いものであったというのが、

渡辺世祐博士の説だ。果してそうなら、そんな身分の低いものが武田家の老臣などにこんなことを説けるはずはない。甲陽軍鑑は軍学というものを樹立しようとの目的をもって編纂された書物だ、山本勘介というえらい軍学者をこしらえた方が都合がよい。まあ、そんなことから、こんな話も出来たのであろう。

二

勝頼は、この諏訪ご料人の生んだ人である。天文十五年の生まれである。四郎と名づけられた。

諏訪ご料人にたいする信玄の愛情は一通りのものではなかったようである。天文二十四年(弘治元年)に信玄は川中島で謙信と対陣しているが、途中今川義元に仲裁を頼んで、謙信と和睦し、大急ぎで甲府へ帰っている。この出陣に信玄はひどく手間取っている。ちょうどその時諏訪ご料人が病気だったのである。出陣の手間どりはそのためであり、義元に仲裁を頼んで講和することになると大急ぎで帰ったのもそのためとしか思いようがない。

信玄は利のためにはどんな残酷非道なことでもするドライな人のように言われており、またそう言われてもしかたのない面のあることは否定しようもないが、諏訪ご料人にたいしてだけは、こんなにもこまやかな心づかいを見せている。ぼくは信玄があまり好きでないが、ここのところは好きである。英雄にはこういうところがなければ魅力がない。

諏訪ご料人にたいする愛情がこうだったから、その生んだ子の四郎にたいしても、格別な愛情があったようである。父の子供にたいする愛情は、その生母にたいする愛情の反映である事例が多いのである。

しかし、諏訪ご前は、弘治元年か、その翌年に死んだらしい。確かなことはわからないのであるが、四郎が十か十一の時である。

四郎は永禄五年六月、元服したが、同時に諏訪家の名跡をつぎ、武田諏訪四郎勝頼と名のることになった。十七歳であった。

信玄には長男義信がいて、それがあとつぎになることにきまっていたのであるが、勝頼はこの兄を葬って自分があとに立とうと計画したと、改正三河後風土記にある。

この書物は徳川家側の書物で、徳川家びいきに書いてあるから、徳川家の強敵であった勝頼を悪く書いているのだとも思われるが、話の筋道がちょいとおもしろいから書いてみる。

永禄四年の頃、義信は、一人の美女を得て寵愛するようになったが、父のきげんをはばかって、信玄の重臣で自分の介添役である飯富兵部の家にあずけ、近習の長坂源五郎一人を連れて、毎夜忍んで行き、夜明けに帰るを常としていた。当時義信は二十七だ。大名の世子がこの年頃になれば、正室のほかに側室の二人や三人あるのは普通のことだし、父の信玄はまたこの方面には相当な道楽ものなんだからものわかりもよかろうし、はばかるところはなかったろうと思われて、この点でもいぶかしいのだが、それは一先ずおこう。

勝頼はこれ幸いと、目付や横目らに賄賂をあたえて買収し、

「若君は夜毎にご近習長坂源五郎一人を召し連れられて飯富兵部の屋敷にまいられ、夜明けにお帰りであります。飯富の屋敷にはお傅役の曾根周防もまいって、人を遠ざけてご密談のていであります。これは早くお屋形様を失って、家督を相続なさろうことの姦謀をめぐらす相談をなさっているのでありますとか」

と、信玄に訴えさせた。
目付どもの報告を聞いて、信玄は義信をおしこめ、飯富兵部・曾根周防・長坂源五郎らを捕えて糺明した。皆、
「さような覚えはござらぬ。何しにお屋形様にたいして不軌の心など起きましょう。口惜しきお疑いであります」
と、涙を流して言い、実はしかじかであると言いわけした。
信玄がこれを信じそうになったので、勝頼は第二の手を打つ。すなわち、信玄の侍臣や侍女に贈賄して、
「その反逆の張本は飯富兵部でありますとか。飯富は若君の心をとらえて引き入れ申すため、その美女を召しかかえ、若君に奉ったところ、若君はついにその色香に迷い、飯富の反逆の企てに同意されたのであると聞いています」
と、信玄に言わせた。
信玄はついにそれを信じ、飯富らを斬り、義信は三年の間幽囚して、永禄七年十月切腹させた。
以上が改正三河後風土記の記述である。
信玄が飯富らを殺し、義信を切腹させたことは事実であるが、これが勝頼の策謀によるというこの記述は信用出来ない。他の人なら知らず、信玄ほどの智将が、こんな浅はかな計略に乗ったとは思えないのである。信玄は義信らを殺さなければならない必要があったのだと、ぼくは見る。
永禄三年の桶狭間の奇襲戦で今川義元が織田信長に討取られた後、今川家はあとをついだ氏真（うじざね）が大阿呆で、とうていうまく行きそうにない。こういう家の領国は、戦国大名にとっては食膳の上の珍味

にひとしい。

「おれが食わねば、北条が食うか、三河の松平が食うてしもうわい」

とばかりに、大いに食指を動かしたわけだが、義信は今川家から夫人をもらっている。氏真の妹がそれだ。大いに反対したろう。また飯富兵部は以前信玄が父の信虎を駿河に追い出した時、板垣信形とともに主として工作したのだ。今川家だってただで力を入れるわけはなく、必ずや相当なことを約束させたろう。おそらく、その約束の中には、末長く今川家の恩義は忘れないというのもあったろう。板垣信形すでに死に、約束の責任者としては自分ひとりが生きのこっている飯富としては、今川氏経略など忍びないものがあって、相当根強く反対したと思われる。

つまり、信玄は駿河か、むすこか、の二者択一の立場に立たされたので、むすこを殺し、駿河を選ぶことにしたのだと思う。金色夜叉のお宮は恋人を捨ててダイヤモンドをえらんだが、信玄は若い時には父親を追い出して甲州をとり、妹聟を殺して諏訪をとり、晩年にはむすこを殺して駿河をとろうとしたという次第。首尾一貫している。勝頼の悪計などあったと思われない。勝頼はこんな悪辣な根性のない人であったようにぼくには思える。

しかし、ともかくもこれで武田家のあとつぎである義信が死んだので、勝頼があとつぎ的立場になった。あとつぎ的立場などとややこしい言い方をしたのは、あとつぎに確定したわけではないからである。

この少し前あたりに、勝頼は伊奈郡の郡代となって高遠城をあずかり、「伊奈四郎勝頼」と通称するようになったと、甲陽軍鑑にある。一般にはこの名前の方が有名だ。

義信が切腹させられた翌年、織田信長は自分の姪——妹が美濃苗木の城主遠山氏に嫁して生んだ女(むすめ)

――を養女として勝頼に縁づけている。これは信長の方から申しこんだ縁談だ。勝頼が信玄の愛子であり、あとつぎ的地位にあるからである。

三

織田家から嫁して来た勝頼の妻は、翌々年、男の子を生んだ。信玄は、

「おれが孫で、信長の孫だ。どちらに似ても器量抜群の名将となるはずじゃ」

と、大満悦で、まだ産室に入っている間に「武田竹王信勝」と名づけ、武田家のあとつぎに定めたという。

勝頼をあとつぎにしなかったのは、すでに諏訪氏をついでいたからであろう。諏訪氏の名跡なぞ、誰か代りの者、たとえばやがて生まれるであろう勝頼の次男を立てるか、諏訪一族の者もいるのだからその者を立てるかすればいいようにわれわれには思われるが、それでは諏訪氏の遺臣らが承知しないという事情があったかも知れない。あるいは、諏訪ご前にたいする信玄の追慕の情が深かったためかも知れない。ぼくは信玄の諏訪ご前にたいする寵愛は最も深いものがあったという解釈だから、この方をとりたい。

信玄が勝頼の人物に不安を抱いたためとか、老臣らが勝頼の人物をきらって反対したからとかいう古来の説は、承認出来ない。信勝があととりとなれば、その実父である勝頼が実権をにぎるようになることはわかり切った話であるからだ。

竹王信勝が生まれてから六年目の初夏、信玄が死んだ。

信玄は末期に、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook